

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	フランス文学	専攻
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科・フランス文学専攻・6年		河野 美奈子 印			
指導教員	所属・職名		氏名			
	異文化コミュニケーション学部・異文化コミュニケーション学科・教授		小倉 和子 印			
自然・人文・社会の別	自然	人文	社会	個人・共同の別	個人	共同 名
研究課題	マルグリット・デュラスの文学作品におけるアジアの表象					
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科・フランス文学専攻・6年		河野 美奈子			
研究期間	2014 年度					
研究経費	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

仏領インドシナ生まれのデュラスは、自身の体験を基にした自伝的作品を数多く書いている。そのため、多くの研究者がデュラスと自伝的作品について、多角的なアプローチの研究を行っている。しかしながら、デュラスとアジアの関係についてはまだ十分に研究が進んでいるとは言い難い。そのため、デュラスと仏領インドシナの関係に重点を置き、社会的なアプローチと文学的アプローチを組み合わせることにより新たなデュラスと仏領インドシナの関係を明らかにしたい。さらに、仏領インドシナだけに留まらず、インドや日本へも目を向け、デュラスによってより観念的な存在へと生成されたインドや日本を作品のなかで読み解くことにより、デュラス作品における重層的なアジア表象を浮かび上がらせることができるのではないかと考えている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[フランス文学] [東南アジア] [植民地]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

マルグリット・デュラスは1914年に当時の仏領インドシナのザーディン(現在のホーチミン市)で生まれた。1932年にフランスへ完全帰国するまでの18年間、教師である両親について仏領インドシナの各地を転々とした。その間に父親の死による家族の経済的困窮、さらに母親が全財産をつぎ込んで買った土地が、役人の不正によって作られた耕作不能地であったことでデュラスの家族は「最下層の白人」としての生活を余儀なくされた。その当時の記憶はトラウマとして残り、デュラスの創作活動に多大な影響を与えたのである。

1943年に処女作『あつかましき人々』(*Les Impudents*, 1943)で文壇デビューしたデュラスは当初、仏領インドシナとは関係のない小説を書くことを試みていた。1950年に発表された初の自伝的作品『太平洋の防波堤』(*Un barrage contre le Pacifique*, 1950)は大きな反響を呼び、フランスで権威のある文学賞の一つであるゴンクール賞の候補作にも選ばれた。その後デュラスは小説、演劇、映画など様々なジャンルに挑戦し、独自の文学スタイルにより、20世紀の文学界の流れの一つと称される「ヌーヴォー・ロマン」の作家の一人として挙げられるようになった。

彼女の代表作としては『モデラート・カンタービレ』(*Moderato cantabile*, 1958)、『ロル・V・シュタインの歓喜』(*Le Ravissement de Lol V. Stein*, 1964)そして『愛人』(*L'Amant*, 1984)が挙げられる。そのなかでも『愛人』はゴンクール賞を獲得し、ジャン＝ジャック・アノーによって1992年に映画化されたことにより商業的にも大成功を収め、デュラスを世界的な作家にまで押し上げた。『愛人』が人々の関心を集めたのは少女と中国人の青年との愛というスキャンダラス性だけではなく、映画の舞台である当時の仏領インドシナの世界による。そのため、多くの人々がデュラスと仏領インドシナ、とくに『愛人』の舞台となったベトナムを繋げているのである。

しかし、デュラスの自伝的作品を考察すると、ベトナムとデュラスという繋がり、やや単純すぎる見解であることがわかる。なぜならデュラスはベトナムのサイゴン(現在のホーチミン)だけに留まっていたのではなく、北のハノイ、さらにカンボジアへと移住しているからである。同じベトナムでも南のサイゴンと北のハノイでは文化圏が異なり、さらにカンボジアとベトナムも全く異なる社会を形成している。

2014年8月フランスのスリジー(Cerisy)で行われた国際デュラス学会によるシンポジウム「MARGUERITE DURAS, PASSAGES, CROISEMENTS, RENCONTRES」において、ジュリア・ウォーターズがインドを舞台にした作品のなかにデュラスが配した地理的特徴に言及しているが、そこでも、デュラスのカンボジア性が指摘されている。

長い間デュラス研究では彼女の独自のエクリチュールや愛が中心的に扱われ、自伝的作品のなかの仏領インドシナはデュラスの生まれた地という以上の役割を持たないものとされてきた。しかし近年ジュリア・ウォーターズを初めとして、デュラスとアジアの関係を見直す研究者も増えてきており、ポストコロニアル的観点からの研究も盛んに行われている。

そのため本研究では、既存の研究を踏まえ、デュラスの自伝的作品を中心に作品における仏領インドシナ表象を明らかにすることを目的とした。

1.デュラス作品における女乞食の存在

最初のアプローチとして、デュラス作品に登場する「カルカッタの女乞食」を研究の中心に据えた。デュラスは同じ人物を、その特徴を変化させながら複数の作品に登場させている。女乞食もまたそのような登場人物の一人であり、とくにアジアを舞台にした作品に登場する。ドミニク・ノゲーズによるデュラスのインタビュー集 *La Couleur des mots*, (2001)においてデュラスは、女乞食は自身の子供時代から来ていると述べている。

女乞食は『太平洋の防波堤』で初めて小説のなかに描かれる。彼女は自分の子供を主人公の少女の母親に託そうと裸足で遠くからやって来る。託された子供は衰弱がひどくすぐに死んでしまうが、この子供を捨てる母親という話を基にしてデュラスは女乞食の話を作り上げた。『太平洋の防波堤』では、子供を託しにやって来た若い娘としてのみ描かれており、まだ女乞食としての役割を担っていない。『太平洋の防波堤』の草稿では女乞食«une mendiante»が使われていることから、デュラスが決定稿であえて女乞食を外し、若い娘としたことが明らかになった。

女乞食がその存在を決定づけるのは『太平洋の防波堤』から16年後に出版された『ラホールの副領事』(*Le Vice-consul*, 1966)においてである。『ラホールの副領事』はインドのカルカッタを舞台にしており、自伝的作品とはみなされていない。デュラス自身もインドに住んだことはなく、フランスへの往来に使われた船の寄港地としてのインドしか知らない。そのため、デュラス作品におけるインドはデュラスによる創造の世界と考えることができるだろう。

『ラホールの副領事』の冒頭は、女乞食の途方もない踏破から始まる。女乞食が故郷であるカンボジアのバタンバン(Battambang)を出発するのは、妊娠したことによって母親から追い出されたことによるものである。この点は『太平洋の防波堤』と物語を共有している。

彼女は北を目指すとして述べながらも、実際には南へと下ってしまう。バタンバンから北にはタイの国境があり、その先にはインドのカルカッタがある。しかし彼女はカンボジア最大の湖であるトンレサップ湖を下り、ベトナムの国

研究成果の概要 つづき

境まで赴き、そのままサイゴンの方までやって来るのである。最後にはベトナムのメコン川河口近くの町に着き、そこで生まれた子供を白人一家に差し出す。その後、彼女は 10 年をかけてインドのカルカッタに到着するのである。

デュラス自身もこの女乞食の踏破の描写は文学的成功を収めていると述べており、『愛人』においてもこの踏破を簡潔に描いている。『ラホールの副領事』の女乞食の踏破は現実にある町の名前を使用しているが、現実的には一人の人間が裸足で到達することは不可能である。この地理と現実の乖離が女乞食を物語の世界へと昇華させたと考えられる。さらに、彼女はアジア大陸を舞台にしたデュラスの他の作品にも現れ、作品間を横断していく。そのため、アジア大陸を舞台にした作品群のなかに次々と女乞食を登場させることで、デュラスは、それらの作品を、女乞食を主軸とした巨大な一つの叙事詩あるいは神話として創出しようと試みたのではないだろうか。

2. 女乞食の魔女性

デュラスは魔女について歴史家ミシュレの言葉を引用しながらたびたび言及している。魔女については時代や地域によって様々な形態がとられるが、デュラスの考える魔女という存在を前提に、女乞食を考察していくことによって、作者が作品を叙事詩的なものにしたことを明らかにしたい。

デュラスによる魔女と女乞食は多くの共通点を見出すことができる。まず森についての言及である。森で超自然的な力を見出した魔女と同様に、女乞食が身を潜め、子供を身ごもるのは常に森である。さらに、魔女の持つ被差別性を念頭に置くことで、女乞食という役割の禁忌性にも言及できるだろう。『ラホールの副領事』では、女乞食は現地のインド人やレプラ患者と繋がり、白人社会から嫌悪と畏怖の対象としてみられる。さらにミシュレによると魔女はほとんどが狂った者であると見なされる。『愛人』では、狂った女乞食として描かれ、狂人としての特徴を強めている。また女性ということもデュラス作品では重要である。

彼女達のような社会における周縁的存在は、デュラス作品の中では反対に中心に置かれる。それは、恵まれた白人社会の内部をあぶり出す存在であり、さらにその超自然的な力を持っていることにより、より自由な存在として描かれている。これはデュラスが植民地で生まれながらも、経済的困窮により白人としての恩恵をうける事が出来なかったために、現地の方がより身近な存在であったことと関係している。そしてこの抑圧された者を中心に小説を描くことは、ポストコロニアル研究のスピヴァクが唱える「サバルタン」と同じ視点を獲得することではないかと考えている。

しかし、デュラスがこのような女乞食を作り出したのはただ単に幼い時のトラウマとも言える体験からだけだろうか。その問いに答えるために、「カンボジアのバレリーナたち」(*Ballerines cambodgiennes*)という短いテキストをもとに考察したい。

3. 「カンボジアのバレリーナたち」から読み解く女乞食

「カンボジアのバレリーナたち」は、デュラスが書きためた未発表の短編集の一つであり、のちに『戦争ノート』(*Cahiers de la guerre*, 2006)に収められ、デュラスの死後に出版された。この短い物語をデュラスが書いた時期は 1930 年代の終わりかそれより少しあとと見なされている。つまり作家になる準備段階のなかで書かれたものである。

「カンボジアのバレリーナたち」のなかでは、「ロクホン」と呼ばれる踊り子が、老婆とともに村々を渡り歩くノマド的な存在として描かれている。「ロクホン」は本来カンボジアの宮廷にいる踊り子を指すため、彼女にはせもの「ロクホン」である。「立ち止まることの許されない部類に属する」女性であり、時には村の男達に体を売る。彼女もまた女乞食と同じ、周縁的な存在なのである。さらに彼女の踊りは魔術性を帯びており、その踊りが何世紀も前から、クメール民族と見なされるものたちを支えているとしている。彼女はその超自然的な力により、太陽、大地、山々などの自然に溶け込む。このシャーマン的な力は、女乞食や魔女と繋げることができるだろう。

デュラスは少女時代の体験をもとに女乞食を『太平洋の防波堤』のなかに登場させたが、この形象はすでに作家としての準備段階で練り上げられていたと考えられるだろう。デュラスの女乞食には、ベトナムというよりもカンボジアの影響が色濃く残っている。カンボジアの大地とインドの影響を色濃く受け継いだカンボジアの民により作られた女乞食は仏領インドシナの大地の多様性を示している。

以上の研究成果は 2014 年度立教 SFR の助成金により、フランスのスリジーで行われたシンポジウムに参加し、『マルグリット・デュラス—生誕 100 周年 愛と狂気の作家』において著作解題を担当したことで得られた成果である。また本研究は、日本フランス語フランス文学会、仏語完全投稿誌 *Littera* (Revue de langue et littérature françaises) へ投稿する予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 河野美奈子、「『太平洋の防波堤』から読む『フランス植民地帝国』—マルグリット・デュラスのインドシナー」、日本フランス語フランス文学会「関東支部論集」、23号、2014年、143-155ページ。

② 河野美奈子、河出書房新社、『マルグリット・デュラス—生誕100年 愛と狂気の作家』、2014年、総ページ数234ページ (デュラス著作解題担当196-227ページ)。

④ Minako Kôno, 《Marguerite Duras à Tokyo, colloque commémoratif》, *Société internationale Marguerite Duras*, Bulletin, N°23, 2014, pp.13-15.

(「マルグリット・デュラス生誕100周年シンポジウム《書くことこそ、と彼女は言う》」、(2014年3月1日 於立教大学) 報告書)。